

株式会社プライムデンタル
三浦知也



(経歴)

- ・2006年 北海道歯科技術専門学校 付属研究科 入学
株式会社プライムデンタル インターンシップ
- ・2007年 北海道歯科技術専門学校 付属研究科 卒業
株式会社プライムデンタル 入社

(演題)

患者にとって最適な補綴治療・補綴装置を目指して

(講演抄録)

日々、あらゆる欠損と向き合う私たち歯科技工士にとっては、安心して口腔内で機能する補綴装置を届けたいと願いながら日常臨床に挑んでいると思います。

補綴装置を製作している中である時、根本的に患者さんの顔貌(表情)や主訴、歯科医師の治療・欠損に至る理由や背景といった情報収集などの理解が不足していることに気づきました。

そこで、自問自答しながら、上司に相談したり、一緒に取り組んだりする機会を持つようにしたところ、歯科技工以外に営業活動や管理・事務活動など、支えてくれる環境と社内スタッフに感謝するきっかけとなりました。

だからこそ私たちテクニシャンは協力し合いながら、歯科技工に集中して挑めるのだと再認識することができました。

又、諸先輩方やテクニシャンからはラボとしての振る舞いや機能する補綴装置をつくるための知識・技術等のご教授、ドクター・ハイジニストからは症例に応じた治療や予後のメンテナンス、指導といった教えを乞い、テクニシャンとして社会人として学びなおす大きな転機を経て今に至ります。

本講演では、どうやったら患者さんが日々「楽しく食べる喜び」を感じられる補綴装置を歯科医師・歯科技工士(弊社内・外、チェアサイド)と共に製作しているかの日常臨床事例などを紹介したいと思います。

第 164 回北海道歯科技工学術研修会

演題・事前抄録演題「材料特性を考慮したマテリアル選択」

講師：辻 秀憲

1984 年北海道旭川市生まれ

2005 年旭川歯科学院専門学校技工科卒業

2006 年マスターセラミストスクール卒業

2006 年 shudentallab 勤務

2008 年 DentCraftstudio 勤務

2011 年千葉歯科クリニック勤務

2013 年 SJCD マスターコース修了

2017 年 ThenorthernlightsDCstudio 開業

2020 年東京にしむら塾修了(第 11 期)

所属学会・団体：日本顎咬合学会会員、北海道歯科技工士会会員 現在

抄録

筆者が歯科技工士として仕事を始めた当時(2006年)、自費診療の補綴は陶材焼付金属冠(Porcelain fused to metal crown / PFM)が主流であったが、現在、貴金属価格の高騰や材料物性の進化に伴い、ガラスセラミックスやジルコニアが台頭している。

業務の主となる材料は、筆者の短い臨床経験のなかでも目まぐるしく変化してきた。その様な時代背景のなか弊社では、開業時より金属鑄造の機器は導入しておらず、ジルコニア、プレスセラミックス(リチウムジシリケート)を用いた補綴装置製作が主となっている。

なかでも CAD/CAM の普及に伴い、モノリシックジルコニアの臨床活用が大幅に広がり、高透光性を有する積層型のジルコニアの登場により、症例に応じた選択肢が増え、シングルクラウンからフルアーチのインプラント補綴装置まで適用範囲は広がっている。弊社でも業務全体の 7 割ほどの症例でジルコニアを使用しているが、临床上全ての症例においてジルコニアが最適というわけではない。患者の要求度や、口腔内環境、補綴条件に応じて、プレスセラミックスを選択する症例も多い。

補綴材料の選択においては様々な考察点が考えられるが、審美性と強度のバランスを考慮し、材料の理工学的特性の理解を深めるのはもちろんの事、歯科医師と共に何がその症例に最適な材料となり得るか、ディスプレイを重ね合える関係を構築する事が最も重要であろう。

一方、昨今では、接着技法の飛躍的な向上により、窩洞形態にとらわれない、最小限の歯質削除による修復処置が可能になっている。弊社でも Minimal Intervention(MI)の観点により、セラミックインレー、ラミネートベニア、テーブルトップベニア、アドヒージョンブリッジ(接着性ブリッジ)等の依頼が年々増えている。CAD/CAM で切削加工が可能なジルコニアを用いた補綴修復が主流となっている昨今ではあるが、残存歯質との調和がより求められる症例など、高透光性材料である、プレスセラミックスを用いる臨床上の優位性もまた大きいように感じる。歯科臨床において、自費診療で使用されるオールセラミック材料としては、ジルコニアに代表されるファインセラミックスと、ガラスセラミックスとに大別される。修復材料の選択においては、修復部位又は範囲、対合関係、形成デザイン、形成量、支台歯色、患者の要求度等に応じて、適宜選択が必要となる。選択いかんによっては、材料の持つ長所が逆に裏目に出る場合もあり得るので、細心の注意が必要である。

今回は弊社での使い分けとして、症例に応じた材料の選択に関してお話しする。